

# 視察先別報告 ザンビア

## 【青年海外協力隊】

### ムクニ地域ヘルスセンター視察

#### 概要

病院スタッフや郡保健局、コミュニティの保健ボランティアとともに、エイズ対策を主業務として、ART（抗レトロウイルス薬を用いた治療サービス）クリニック運営に関する業務改善、患者台帳の整備、患者への服薬理解を高めるための啓発活動など、非医療行為の分野でヘルスセンターを支援する。

1

伊澤 咲弥

ザンビアの看護師資格をもっていて、診断・処方まで行うことができる現地の看護師は3名。ここでは体重計測などは現地ボランティアも協力し、運営にあたっている。驚愕したのは、清掃員が注射や処方を行っていることだ。協力隊の方は、主にセンター全体で人が足りないところの手伝いをしているとのことだったが、ザンビアの看護師免許がないため、医療行為はできない。私が感じたことは主に2点ある。1点目は日本から派遣された隊員が人手不足にもかかわらず、医療行為を行えない状況下にあったこと。2点目は資格のない清掃員が医療行為を行っていたこと。この点に関しては、看護教育や制度の見直しが必要だと思った。

2

伊藤 葉子

青年海外協力隊の神さんが活動しているヘルスセンターを視察した。ザンビアでは、圧倒的に医療従事者が足りていない状況が続いており、ここでも月に二回准医師が来るのみ。普段は看護師と環境衛生師しかないという。こうした限界やその他の問題点を改善したくてもできないという神さんの葛藤が伝わってきた。建物や機械といった、モノを支援することは、目に見える支援でわかりやすい。しかし、何よりもヒトを育てることがこの国において最優先事項だと、この視察を通して感じた。ヒトが育つ環境が整えば、モノによる支援の効果も大きくなると感じた。

3

今田 澄子

隊員はまもなくの帰国を控え、けだるく「何が見たいですか」と尋ねた。他の視察先でお会いした方々のパッションといささか異なり、あまり積極的に話が聞けなかった印象だ。お雇い外国人医師は2週に1度の約束が来たり来なかったり、看護師は多忙で機嫌が悪く、手が足りなくて掃除夫が注射を打つ。ザンビアでの資格を有さない隊員は、日本の看護師経験を生かすことができない。

国全体が抱える医療事情の厳しさが、従事者一人一人に重くのしかかるのか。

定期健診に来た乳児とお母さん達の集まりは色とりどりの布地をまとうてお花畑のようだ。子供達がエイズ他の禍と無縁で大きくなれるよう。しかしこの国の5歳未満児死亡率、実に11人に一人である。



4

江口 辰之

普段は環境衛生士と2人で運営しているが、視察時は神隊員だけが活動していた。HIV/エイズの予防や母子手帳の普及に努めており、日々各家への回覧サービスをしており、ビタミン剤やマラリア検査キットを提供している。HIVに関しては元々郡が薬を支給していたが、人々に渡し易いように、現在ではヘルスセンターが渡すようにしている。また、週に1回金曜日は乳幼児健診を行っている。

小さな村で地元密着のヘルスセンターを視察させて頂き、このような草の根の医療の大切さを教えて頂いた。

5

黒川 叔乃

「何も無い、誰もいない場所で\*環境衛生士とのゼロからの始まりだった。」

来月には任期を終え帰国が決まっている神隊員は、私たちに笑いながら話してくれたが、村人が約1万人いる地域のヘルスセンターを2人で機能させるには、かなりの苦労があったと思う。

壁には分かりやすい言葉と絵が描かれた手作りのポスターが貼られ、試行錯誤しながら住民に病気予防の大切さを伝えてきた様子が見られた。また、頻繁に発生する停電対策のために電子カルテと紙カルテを併用するなど、至る所で隊員の功績を垣間見ることができた。

今では医師と看護師が定期的に訪問し、乳幼児健診日の体重測定もボランティアが対応するなど、神隊員が苦勞して運営に携わったヘルスセンターが今後も継続し続ける体制になっており安堵した。

\*環境衛生士：Environmental Health Technician

## Republic of Zambia

- 6 河本 梨絵 公衆衛生分野で地域のヘルスセンターで衛生管理を担うJOCVの神隊員を訪問。コミュニティによく溶け込んでいて笑顔が印象的だった。  
訪れた日は、週に一回の乳児健診の日。天井から吊下げられた秤に、袋に入れられた赤ちゃんをぶら下げ体重を測定。大泣きする子に、きよんとする子。健診結果を記録する用紙を手に、子どもを見守る若いお母さんたち。クリニックの廊下にすわりと座って予防接種の順番を待つ母子。歴代のJOCVの啓蒙活動が生きていると感じた。決して広くないクリニックだが、外来患者、HIV患者、乳児を連れた母、妊産婦や彼らの家族など、大勢の人が来る。地域医療の扱う範囲の広さと役割の大切さを実感した。
- 7 高場 希恵 神隊員はセンターの環境整備や、エイズ治療のプロジェクトのサポートを目的として派遣されたが、派遣されてからほとんどの間、人手不足のセンターの運営で手一杯であるとおっしゃっていた。実際この日も外来や乳幼児健診でセンターにはたくさんの人が訪れており、忙しそうだった。せっかく高い技術と目的を持って日本から行っているのに、それを十分に発揮する余裕も無く任期を終えてしまうというのは少し残念だと思った。常駐の医師もおらず、現地の看護師が診断・処方しているとのことで、ザンビアの医療人材の確保が急がれる。
- 8 中里 祥子 訪問時は乳児健診日であり、多くの親子でにぎわっていた。子どもたちは4週に1度体重測定に訪れ、次の測定日をカードに記入して母親へ渡すことで継続的な発育のフォローアップがされていた。予防接種の接種率もよいと言う。子どもたちの健康管理がきちんとされていることに正直驚いた。ここでも現地ボランティアが活躍しており、住民の健康管理に寄与していた。赴任当初は看護職の同僚がおらず、神隊員は現地の環境衛生士1人とともに任期の大半を過ごしてきたという。現地の看護師が着任後、マンパワーとしての活動からサポート役に回った彼女だが、仕事に来ないこともあるという現地スタッフのみになってからもこのヘルスセンターが変わらず機能していくのか見守りたいところである。
- 9 花村 さくら 体調不良のため視察不参加
- 10 峰元 義人 「赴任した時は環境衛生士と2人だけ、ARTクリニックを回すだけで精一杯だった。任務の公衆衛生はまだまです。」と神(じん)隊員は言う。任務はクリニック運営の業務改善、患者台帳の整備、服薬理解の啓発活動などである。  
訪問した日は、丁度、乳児の健診日に当たっており、現地ボランティアが壁のない筒抜けの石造りの施設で、天井から吊した秤で子供の体重を量り記録していた。母親たちの中で一番若い母親は15歳だという。  
健診の順番を待っている母親たちがいるセンターの各部屋や廊下には隊員手作りの説明書やデータ表が貼ってあり、隊員の日頃の苦労が偲ばれる。神隊員は9月末で任務終了という。センターの今後が気にかかるところであるが、日本のODAの基本は自立の発展に向けた自助努力を支援することである。クリニック運営の自立、発展に向けた人材はしっかり育っているはずである。
- 11 蓑田 竜史 地元の人たちが乳幼児健診の体重を量るボランティアに入っている。マラリア検査キット、治療薬などもあるが定期的にこない。あるときは期限切れ、不足する時もある。HIV感染者にも村の診療所から配布できるようにして、薬にアクセスしやすくなっている。薬や器具などが海外から配布されても、先進国で使用されているように効率よくはない。システムだけでなく、細かい使い方や意識を浸透させるのは時間がかかると感じた。きれいな水を作るJICAからの機械も、現地の水にあつておらず(石灰が多く)故障していたり…。故障して終わりということもあるそうだ。(修理したりする技術があればより効果的)日本で看護師の資格があっても、ザンビアの資格がないと医療行為はできない。分娩室もあるが、ほとんどが村で産んでしまう。その際の、処置はどうなのか疑問が残った。